



3・^{さん}燦・^{the}SUN ~認め合おう・話し合おう・創り出す~



The important thing is not to stop questioning. (Albert Einstein)

言葉の魅力、面白さ…インターネットから Vol.1

インターネットは「言葉」にあふれています。人々の心をつかんだ言葉は世界中を駆け巡り、役目を終えると消えていく。また、「言葉」は「言葉」を生み出します。ツイッターなどでは、思わず「うまい!」と言いたくなるレスポンスが。そんな言葉をプロ野球関係から拾ってみました。

クライマックスシリーズが行われています。注目は千葉ロッテマリーンズの「5年周期説」。2005年のシリーズでは2位から勝ち上がって日本一、5年後の2010年には3位から勝ち上がってやはり日本一になり、「史上最大の下克上」と言われました。さて今年は何?

そんなマリーンズ、得意の「挑発」ポスターが話題になっています。球団広報に抜群のセンスをお持ちの方がいらっしゃるのでしょうか。

「クライマックスシリーズファーストステージ突破率 100%の衝撃!」
「ファーストステージ? はい、通過点です」
「待てよ…この状況、いい思い出しか残ってないぞ!」
「タカ狩りの前に、札幌に寄ってハム食べてこう!」

しかしながら、「鷹狩り」とは鷹を使って獲物を捕らえるのですよね…。さて、キャッチフレーズ通りになるのでしょうか。

プロ野球と言えば、我らが楽天イーグルスの優勝を支えた1人、斎藤隆選手が引退しました。彼の言葉です。

「活躍している姿を見せることも自分の仕事ですが、現役最後の姿を見せることも、勝手な思いかも知れませんが自分の仕事だと思ったのです。」

ジंकス・験担ぎ・都市伝説…何でも利用せよ

W杯ラグビーで私たちの心をわしづかみにした日本チーム。五郎丸選手のあのポーズも日本中で流行しています。五郎丸選手はあのポーズ自体には「あまり意味は無い」と語っていました。ではなぜあのポーズをするのでしょうか。

MLBで活躍するイチロー選手は、「何かをスタートさせる時はどちらの足から」を決めています。ストッキングを履く、靴を履く、フィールドに出る…。今はやめたそうですが、以前は試合のある日のお昼ご飯は必ず奥様の作ったカレーを食べて出かけていました。

人間は、何かを続けていると集中力が低下し、迷いが生じます。そこで、同じことを繰り返すことで普段と同じ仕事ができるように自分を保っているわけです。五郎丸選手の動作はまさにそれ。世間では「ルーティン」と呼ばれています。始まりは「ジंकス」「験担ぎ」なのかも知れませんが、それを「ルーティン」に格上げしています。

面白いのは、イチロー選手の場合、自分の調子を見極めて「ルーティン」を変えているということ。バッティングの調子が落ちてくると、スタートする足を逆にするなど。柔軟ですね。

皆さんは「ルーティン」を持っていますか。「ジंकス」「験担ぎ」何でもOKです。平常心を保つ儀式として、何か1つ、大事な場面で行ってみたいはいかがでしょうか。

7:30の人たち…自主学習を続けています

朝7時30分、教科書やノートを持って3年棟3階T-T室に集まる人々。思い思いの席に着き、自主勉強が始まります。英語の教科書の本文を読みながら書いている人がいます。理科や社会の問題を解いている人がいます。ルールは声を出して読むこと。

スタートして2週間ですが、早くも変化が表れています。その一つは、「整った文字を書くようになった」。すごいですね、訓練の力は。

また、漢字や単語の書き取りを繰り返すと、文字を覚える以上の効果があるように思います。

マンデルブローは、『カオス理論』(決定されているにもかかわらず予測が不可能に見える事柄について、コンピューターを用いて法則を発見しようとする理論)の提唱者の1人ですが、「全てのものは同じに見える」と言っています。『ジュラシック・パーク』(マイケル・クライトン、早川書房)に次のような台詞があります。「大きな山を遠くから見ると、ぎざぎざの山型に見える。さらに近づいて、その大きな山の中にある小さな峰を見てみると、やはりぎざぎざの山型をしている。(中略)小さな石のかけらを顕微鏡で見てもやはりそこには、大きな山と同じフラクタル形が見られる」「…みずから何度も半分折りたたむとでもいえないのかな。…」

漢字や単語は、日本語や英語を構成する最小単位です。このマンデルブローの法則に従えば、その中に日本語や英語の法則が隠れていると言えるでしょう。漢字や単語の書き取りをきちんと続けている人は、知らず知らず日本語や英語のリズムを自分の中に取り込んでいるのかも知れません。

皆さん、T-T室にはまだ席がありますよ。

言葉の魅力、面白さ…インターネットから Vol.2

声に出して読みたい手紙

東京に「虎屋」という和菓子屋さんがあります。その本店が、立て直しのために閉店しました。その際、ご店主がホームページに載せたご挨拶が話題になっていました。客に対する思いやりにあふれた言葉から、書き手の誠実な人柄がうかがえます。心に響く文章です。一緒に声を出して読んでみましょう。

十七代 黒川光博より 赤坂本店をご愛顧くださったみなさまへ

赤坂本店、および虎屋菓寮 赤坂本店は、10月7日をもって休業いたします。

室町時代後期に京都で創業し、御所御用を勤めてきた虎屋は、明治2年(1869)、東京という全く新しい土地で仕事を始める決断をしました。赤坂の地に初めて店を構えたのは明治12年(1879)。明治28年(1895)には現在東京工場がある地に移り、製造所と店舗を設けました。

昭和7年(1932)に青山通りで新築した店舗は城郭を思わせるデザインでしたが、昭和39年(1964)、東京オリンピック開催に伴う道路拡張工事のため、斜向かいにあたる現在地へ移転いたしました。「行灯(あんどん)」をビルのモチーフとし、それを灯すように建物全体をライトアップしていた時期もありました。周囲にはまだ高いビルが少なかった時代で、当時大学生だった私は、赤坂の地にぽっと現れた大きな灯りに心はずませたことを思い出します。

この店でお客様をお迎えした51年のあいだ、多くの素晴らしい出逢いに恵まれました。

3日と空けずにご来店くださり、きまってお汁粉を召し上がる男性のお客様。

毎朝お母さまとご一緒に小形羊羹を1つお買い求めくださっていた、当時幼稚園生でいらしたお客様。ある時おひとりでお見えになったので、心配になった店員が外へ出てみると、お母さまがこっそり隠れて見守っていらっしゃったということもありました。

車椅子でご来店くださっていた、100歳になられる女性のお客様。入院生活に入られてからはご家族が生菓子や干菓子をお買い求めくださいました。お食事ができなくなられてからも、弊社の干菓子をくずしながらお召し上がりになったと伺っています。

このようにお客様とともに過ごさせて頂いた時間をここに書き尽くすことは到底できませんが、おひとりおひとりのお姿は、強く私たちの心に焼き付いています。

3年後にできる新しいビルは、ゆっくりお過ごしになる方、お急ぎの方、外国の方などあらゆるお客様にとって、さらにお使い頂きやすいものとなるよう考えています。

新たな店でもたくさんの方々との出逢いを楽しみにしつつ、これまでのご愛顧に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

虎屋 17代

代表取締役社長 黒川光博